

平成27～29年度生の
養護実習参加学生の学習支援の検討
—保健教育における課外指導と
ピア支援活動による教育効果—

Examination of learning support of students participating in
School nursing practice training in 2015-2017
— Educational effect by extracurricular guidance
and peer support activities in health education —

楠 本 久美子

Kumiko KUSUMOTO

四天王寺大学紀要
第67号 2019年3月

(抜刷)

平成27～29年度生の養護実習参加学生の学習支援の検討

—保健教育における課外指導とピア支援活動による教育効果—

Examination of learning support of students participating in
School nursing practice training in 2015-2017

— Educational effect by extracurricular guidance and peer support activities in
health education —

楠本 久美子

Kumiko KUSUMOTO

ピア支援活動による支援効果に関する報告書は多くあるが、ピア支援活動を利用した教育方法による教育効果を検討した報告書は見られない。本研究は、将来養護教諭を目指す学生の「保健教育（保健指導・保健学習）」に関する指導力習得と向上を目的に、平成27年度から1年次開講の「養護概説」、2年次開講「学校保健Ⅱ（含学校歯科保健）」には、課外指導においてピア支援活動を利用し、3年次開講の「養護実習指導」には、養護実習用とピア支援活動生養成用の課外指導を行っている。1～3年次の一貫した「保健教育（保健指導・保健学習）」に関する課外指導による教育効果を検討した結果、平成28、29年度生に教育効果が認められたので報告する。

キーワード： 保健教育（保健指導、保健学習） 課外指導、ピア支援活動

I. はじめに

平成20年の中央教育審議会答申によると、深刻化する子どもの現代的な健康課題の解決に向けて、学級担任や教科担任等と連携し、養護教諭の有する知識や技能などの専門性を保健教育に活用することがより求められていることから、学級活動などにおける保健指導はもとより専門性を生かし、チーム・ティーチングや兼職発令を受け保健の領域にかかわる授業を行うなど保健学習への参画が増えており、養護教諭の保健教育に果たす役割が増していると述べられている。また、小・中学校の保健学習を担当する教員の意識調査では、小学校教諭は「他の教諭に代わってもらいたい（31.7%）」、「養護教諭の方に適正が高い（72.3%）」¹⁾とあることから、養護教諭を目指す学生は、「保健教育」が担当できる指導力を十分身に付けておく必要がある。

本学の養護教諭養成課程は、「養護実習」までに専門科目のコア科目として「養護概説」、「学校保健Ⅰ（含学校安全）」、「学校保健Ⅱ（含学校歯科保健）」、「衛生学・公衆衛生学Ⅰ」、「栄養学」、「精神保健」、「解剖生理学Ⅰ」、「看護学関連科目」及びその他に教職専門科目を履修し、教育系の養護教諭養成課程となっている。1年次の「養護概説」「学校保健Ⅰ（学校安全を含む）」では、養護教諭の職務と役割を理解させ保健室を通して児童生徒の健康保持増進を教育の視点から発

信できることを目標としている。2年次の「学校保健Ⅱ（学校歯科保健含む）」では、指導案を作成して授業計画（教材観、児童・生徒観、指導観）を十分練り、自分の考えや授業方針を明確に設定できることを目指している。3年次の「養護実習指導」では、ピア支援活動による後輩向けの授業実践や指導案作成支援を体験し、「保健教育」を具体的に学習することにより指導力を身に付けさせることを目指している。今回、1～3年次までの一連の「保健教育」に関わる指導案作成からピア支援活動による授業体験までの評価や意見等について調査を行ったのでその成果を報告する。

Ⅱ. 倫理的配慮

調査依頼書は、授業前に配布し、調査依頼書に明記された趣旨を口頭で読み上げ、回答は無記名であり自由意思であること及び個人又は団体が特定されないことを説明し、調査の趣旨に同意の意思表示を明記した回答者に調査・研究の協力を得た。

Ⅲ. 研究の方法

1) 対象者

本研究の対象者は、教育系養護教諭養成課程の平成27年度以降入学の養護教諭1種免許状取得を希望する学生である。表1の通り、平成27年度1年生32名、2年生38名、3年生39名であり、平成28年度1年生35名、2年生32名、3年生36名であり、平成29年度1年生31名、2年生35名、3年生32名の女子学生である。

表1. 対象者人数

	1年生	2年生	3年生
27年度	32	38	39
28年度	35	32	36
29年度	31	35	32

3年生は「養護実習指導」において4～5人編成のグループで学習を進め、模擬保健指導又は模擬授業（保健）のどちらかを選択し、グループで発表する。年度別のグループ数は表2に示す通りである。グループの編成人数は、平成27年度の保健指導が5人編成の7グループ、保健学習は4人編成の1グループであり、平成28年度の保健指導が5人編成の4グループであり、保健学習も4人編成の4グループであり、平成29年度の保健指導が5人編成の2グループ、保健学習が4人編成の3グループと5人編成の2グループである。

表2. 保健指導又は保健学習のグループ数

	27年度	28年度	29年度
	n=39	n=36	n=32
保健指導	5×7G	5×4G	5×2G
保健学習	4×1G	4×4G	4×3G 5×2G

2) 研究方法

3年生は「養護実習指導」において相互評価（資料1）²⁾と自己評価（資料2）³⁾を記名式で行い、1、2年生は3年生のピア支援活動に対する無記名式評価と無記名自記式調査①、②を行った。

資料1. 相互評価表

	相 互 評 価	大変良かった	良かった	良くなかった	全くできなかった
		3点	2点	1点	0点
観点1 授業の流れ	(1)授業の導入は充分であったか。				
	(2)学習目標は明確にされたか。				
	(3)十分な深まり,山場が構成されたか。				
	(4)まとめは充分であったか。				
	(5)目標は充分達成されたか。				
観点2 指導態度	(6)子どもの理解度を確認しながら進めていたか。				
	(7)板書は丁寧で、わかるように工夫されていたか。				
	(8)言葉の使い方はわかりやすかったか。				
	(9)生徒の興味や注意を持続させる配慮がみられたか。				
観点3 指導態度	(10)教師は充分自信をもって指導していたか。				
	(11)子どもの発言を充分活かして授業を進めていたか。				
観点4 雰囲気	(12)子どもがいきいきと活動していたか。				
	(13)子どもが授業にとけこんでいたか。				

資料2. 授業自己評価表

	授業自己評価	大変良くできた	良くできた	できなかった	全くできなかった
		3点	2点	1点	0点
目標・背景	(ア)学習目標及び設定の背景が明確である。				
計画力	(イ)設定した目標に達成するための計画に独自性がある。				
教材 研究力	(ウ)解説する根拠やデータに信頼性がある。				
	(エ)学習の展開及び考えが一貫している。				
表現力	(オ)適切な文言や表現をしている。				

(1)3年次の学生は、養護教諭1種免許状取得のため、5セメ次夏学期開講の免許状必修科目「養護実習指導」を4月末日までに履修を終え、5～9月に3週間の教育（養護）実習に参加する。4月末の「養護実習指導」の13,14回目の授業において「模擬保健指導又は模擬授業（保健）」のいずれかを選択し、4～5人編成のグループになってテーマの設定を行う。テーマは養護実習校先の校種に相応しいテーマを設定し、学習指導要領に則り指導案及び教材等を作成し、45分間の模擬保健指導又は模擬授業（保健）を行う。学生たちが満足できる模擬保健指導又は模擬授業（保健）を学習させるために、13、14回目の授業以外に課外指導の時間も設けている。

課外指導は、課外指導①と②がある。

課外指導①は養護実習に参加する学生全員対象であり、主に教材研究と指導案作成を平成27

年度が60分間を3回行い、平成28、29年度は、90分間を3回実施した。課外指導には、模擬保健指導又は模擬授業（保健）の事前練習は含まれていない。事前練習は、グループ内で自主的に練習することを勧めているが、平成27年度では3グループが、平成28、29年度は全グループが2～3回の事前練習を行っている。

課外指導②は、ピア支援活動生養成のための課外指導であり、3年生の模擬保健指導又は模擬授業（保健）の相互評価の最上位の評価を得た学生対象である。課外指導②の内容は、2種類あり、課外指導②-1が1年生向けの保健指導又は保健学習用の事前学習であり、課外指導②-2が2年生の指導案作成支援に関わる事前学習である。

模擬保健指導又は模擬授業（保健）の児童・生徒役は、模擬を担当する学生と同じ「養護実習指導」の履修生である。模擬保健指導又は模擬授業（保健）後、児童・生徒役は記名式相互評価を、教師役は記名式自己評価を記入する。但し、教師役学生も児童・生徒役学生も4～5人編成のグループであるので、個人の評価ではなく、グループ内で話し合って適正な評価を決めることとしている。

「養護実習指導」において模擬保健指導又は模擬授業（保健）を学習した学生の学習効果を検討するために、養護実習校での成績評価を参考にした。養護実習での成績評価は、「研究的態度」として、評価内容が「教材研究をよく行い、また学校教育全般について意欲的に学び取ろうとする態度があるか」を査定基準とし、成績を100点満点で評価される。この「研究的態度」の成績から保健指導又は保健学習を担当した学生たちの平均点を算出した。保健指導及び保健学習もどちらも担当していない学生たちは、保健教育以外を担当して評価を得ているので、同じく学生たちの成績の平均点を算出した。

(2)「養護実習指導」において、学生たちは模擬保健指導又は模擬授業（保健）の相互評価を得て、評価の高かったグループは指導案を大学1年生向けの内容に変更して、6月初旬に1年生向けに保健指導又は授業（保健）を行うことになっている。但し、観点1～5の相互評価が各観点の高得点「大変良くできた（3点）」又は「良くできた（2点）」が6割以上あって、「全くできなかった（0点）」がないことを要件とした。高得点の評価を得たグループは、課外指導時に教員の指導を受けて指導案を大学1年生向けの内容に変更し、必ず課外指導②-1を受け、模擬保健指導又は模擬授業（保健）を数回の事前練習を行い、指導案もその都度修正し、1年生の保健指導又は授業（保健）に臨んだ。

但し、1年生の保健指導又は授業（保健）を担当する3年生は、ピア支援活動の目的・知識、意欲や技能（資料3）⁴⁾を習得し、ピア支援活動自己評価が「十分できた」と「できた」の評価以上である者に限った。

各年度別のテーマは、平成27年が保健指導の「食育と健康―野菜を摂ろう―」、平成28年度は保健指導の「生活習慣病の予防」、平成29年度は保健学習の「禁煙と薬物乱用防止」であった。保健指導又は授業（保健）終了後、1年生は、保健指導又は授業（保健）を担当した3年生に対する無記名式授業評価調査（資料4）⁵⁾と無記名自記式調査①「3年生による保健指導又は保健学習に対する1年生の意識調査」に回答した。

資料3. ピア支援活動の自己評価表

ピア支援活動の自己評価		十分 できた	できた	できてい なかった	全くだ きえない
		3点	2点	1点	0点
知識・ 理解	(1)課題について説明できる				
	(2)大学の目的、教育の特色を説明できる				
	(3)ピア・エデュケーションの考え方や目的が説明できる				
	(4)最近の学生、生徒の思考・行動様式について説明できる				
	(5)集団を指導する際の指導方法について、その要点を説明できる				
関心・ 意欲・ 態度	(6)ピア・エデュケーションに関心を持ち、自ら学ぶ				
	(7)授業を通して得た経験を、インターンシップやボランティアをはじめ、学生相互の支援やサービス・ラーニングに積極的に生かそうとする				
技能・ 表現	(8)他者と適切なコミュニケーションをとることができる				
	(9)集団を指導するための基礎的な技術を習得している				

資料4. 授業評価表

授業評価		大変良 かった	良かった	良くな かった	全くだ きなかった
		3点	2点	1点	0点
観点1 授業の 流れ	(1)授業の導入は充分であったか。				
	(2)学習目標は明確にされていたか。				
	(3)十分な深まり、山場が構成されていたか。				
	(4)まとめは充分であったか。				
観点2 指導態度	(5)学生の理解度を確認しながら進めていたか。				
	(6)板書は丁寧で、わかるように工夫されていたか。				
	(7)言葉の使い方はわかりやすかったか。				
	(8)学生の興味や注意を持続させる配慮がみられたか。				
観点3 指導態度	(9)指導者は充分自信をもって指導していたか。				
	(10)学生の発言を充分活かして授業を進めていたか。				
観点4 雰囲気	(11)学生はいきいきと活動できたか。				
	(12)学生は授業にとけこんでいたか。				

(3)「学校保健Ⅱ（含学校歯科保健）」の7月初旬14、15回目「保健教育」に関する授業は、養護実習校の研究授業で配布された学習指導案を実習校の許可を得て参考資料としている。「保健教育」の授業では、4～5人編成で学習指導案を作成し、14回目の授業では、学習指導要領の利用方法と解説、学習指導案作成の方法と解説を行い、保健指導と保健学習の違いを理解させている。15回目の授業に学習指導案を完成させている。14、15回目の間にさらに90分間、3回の課外指導①を設けている。相互評価の最上位のグループは、15回全て終了後に、別の課外指導②を受けて、ピア支援活動が準備できるように設定している。

但し、2年生のピア支援活動を担当する3年生は、課外指導②-2を受け、グループの自己評価の平均点が各3項目の「知識・理解」「関心・意欲・態度」「技能・表現」において2点以上あることを条件とした。

ピア支援活動を受けた2年生はピア支援活動に関する無記名自記式調査②「3年生によるピア支援活動に対する2年生の意識調査」に回答した。

IV. 結果

調査対象者数は少ないが、結果はHalbou5を用いて χ^2 検定及びt検定を行った。

- 1) 「養護実習指導」での模擬保健指導又は模擬授業（保健）の相互評価（資料1）の最上位と最下位の結果については、表3～6の示す通りである。

表3. 模擬保健指導又は模擬授業の相互評価（平均点）

年 度	27年度		28年度		29年度	
グループ数	N1=8		N1=8		N1=7	
順 位	最下位	最上位	最下位	最上位	最下位	最上位
授 業 形 態	保健学習	保健指導	保健学習	保健指導	保健指導	保健学習
観 点 1	1.6	2.5	1.9	2.8	2.1	2.9
観 点 2	1.5	2.6	2.0	2.8	2.2	2.8
観 点 3	1.5	2.6	1.8	2.9	2.1	2.8
観 点 4	1.8	2.8	2.0	2.8	2.3	2.8

表4. 模擬保健指導又は模擬授業の自己評価（平均点）

年 度	27年度		28年度		29年度	
グループ数	N1=8		N1=8		N1=7	
順 位	最下位	最上位	最下位	最上位	最下位	最上位
授 業 形 態	保健学習	保健指導	保健学習	保健指導	保健指導	保健学習
目 標 ・ 背 景	3.0	3.0	2.6	3.0	2.0	3.0
計 画 力	3.0	3.0	2.6	2.0	2.5	2.5
教 材 研 究 力	3.0	3.0	2.6	3.0	2.5	3.0
表 現 力	2.6	3.0	2.6	2.0	2.5	2.0

表5. 「養護実習」での保健指導又は保健学習の担当者数

	27年度	28年度	29年度
	n=39	n=36	n=32
保健指導	17 43.6	26 72.2	19 59.4
保健学習	3 7.7	8 22.2	9 28.1
担当なし	※19 48.7	2 5.6	4 12.5

上段：人 下段：% ※：p<0.01

表 6. 保健指導又は保健学習の養護実習校での成績（平均点）

	27年度	28年度	29年度
	n=39	n=36	n=32
保健指導 の成績	17 75±4.5	26 88±3.3	19 91±6.5
保健学習 の成績	3 77±3.4	8 90±5.1	9 94±5.7
保健教育以外 の成績83.0	19 82±6.2	2 89±4.4	4 88±4.8

上段：人数 下段：平均点

(1) 表 2 からは、平成27～29年度の保健指導と保健学習別グループ数を比較すると、平成29年度は保健指導担当数が若干減って、保健学習担当者数が増加しているのが解った。

表 3 では、5 セメ次夏学期開講科目「養護実習指導」の13回目の授業において模擬保健指導又は模擬授業（保健）を受けた児童・生徒役の学生と指導教員による相互評価の観点別の平均点である。

平成27年度の最上位の保健指導の観点1の平均点は2.5点、観点2と3はともに2.6点、観点4は2.8点であった。平成28年度の最上位の保健指導の観点1、2、4の平均点は、ともに2.8点であり、観点3は2.9点であった。平成29年度の最上位の保健学習の平均点は、観点1が2.9点、観点2、3、4は共に2.8点であった（表2）。各年度間の有意差は認められなかった。

最下位の平均点は、平成27年度の最下位の保健学習の観点1の平均点は1.6点、観点2と3はともに1.5点、観点4は1.8点であった。平成28年度の最下位の保健学習の観点1、の平均点は、1.9点であり、観点2と4はともに2.0点、観点3は1.8点であった。平成29年度の最下位の保健指導の平均点は、観点1と3がともに2.1点、観点2は2.2点、観点4は2.3点であった（表3）。

平成27年度生の評価平均点は、最上位と最下位ともに平成28、29年度生のそれよりも若干低い結果であった。しかし、平成27～29年度間の最上位と最下位ともに評価点に有意差はなく、各年度の最上位と最下位間にも有意差は認められなかった。

平成29年度生の最上位と最下位の両者の相互評価点が平成27、28年度生と比較してやや接近していることが解った。

(2) 自己評価は表4の示す通りである。平成27年度の最上位の保健指導の「目標・背景」「計画」「教材研究力」「表現力」の自己評価の平均点は全て最高点の3.0点であった。

平成28年度の最上位の保健指導の「目標・背景」「教材研究力」の平均点は3.0点であり、「計画」「表現力」の平均点は2.0点であった。

平成29年度の最上位の保健学習の「目標・背景」「教材研究力」の平均点は3.0点であり、「計画」の平均点が2.5点、「表現力」のそれが2.0点であった。

平成27年度の最下位の保健学習の「目標・背景」「計画」「教材研究力」の自己評価の平均点は最高点の3.0点であり、「表現力」の平均点が2.6点であった。

平成28年度の最下位の保健学習の「目標・背景」「計画」「教材研究力」「表現力」の平均点は全て2.6点であった。

平成29年度の最下位の保健指導の「目標・背景」の平均点は2.0点であり、「計画」「教材研究力」「表現力」の平均点が2.5点であった。

平成27年度の最下位と最上位及び平成28年度最下位の授業自己評価は、表3の示す相互評価よりも高いことが解った。授業自己評価の最上位及び最下位共に、各年度間には有意差は認められなかった。

(3) 表5は、養護実習での保健指導又は保健学習を担当した学生数を示している。平成27年度生の保健指導の担当者数は、17名(43.6%)であり、保健学習は3名(7.7%)と少なく、どちらも担当しなかった学生が約半数の19名(48.7%)もいた。

平成28年度は、保健指導を担当した学生が26名(72.2%)であり、保健学習担当者が8名(22.2%)、どちらも担当しなかった学生は4名(5.6%)であった。平成29年度の保健指導担当者は19名(59.4%)であり、保健学習担当者が9名(28.1%)であり、どちらも担当しなかった学生は4名(12.5%)であった。

平成27年度の半数の学生が実習校での保健指導又は保健学習を担当していない理由は調査していない。推測できる理由は、学生本人が担当を辞退したか、指導教員が保健指導又は保健学習の実践を計画しなかったかのどちらかと思われる。

平成29年度では、養護実習校での保健指導担当者率が平成28年度の保健指導担当者率よりも若干低くなっている。低くなっているとは言え、保健学習担当者率がさほど上がっているわけではなかった。

平成27年度生は、平成28、29年度生と比較して保健指導又は保健学習の担当していない学生数が平成28、29年度生よりも多く0.01%有意水準で有意差が認められた。それ以外には有意差は認められなかった。

(4) 表6では、養護実習校での成績である。養護実習の成績評価の「研究的態度」の成績から保健指導又は保健学習を担当した学生たちの平均点を算出した。保健指導及び保健学習もどちらも担当していない学生たちは、保健教育以外を担当して評価を得ているので、参考に学生たちの成績の平均点を算出した。

平成27年度の保健指導担当の平均点は75点であり、保健学習担当者の平均点が77点、保健教育以外担当者の平均点が82点であった。平成28年度の保健指導担当の平均点は88点であり、保健学習担当者の平均点が90点、保健教育以外担当者の平均点が89点であった。平成29年度の保健指導担当の平均点は91点であり、保健学習担当者の平均点が94点、保健教育以外担当者の平均点が88点であった。

平成27年度生の成績は、保健指導、保健学習、保健教育担当の平成28、29年度生と比べて若干低いですが、各年度間に有意差は認められなかった。

2) 「養護実習指導」において、保健指導又は保健学習を担当した3年生が、児童・生徒役の学生から相互評価を受け、最上位の評価を得た場合、3年生は1年生向けに保健指導又は保健学習を行うことになっている。3年生が1年生向けに保健指導又は保健学習を行って後、1年生が無記名式授業評価と無記名自記式調査①に応えた結果は、表7～8、10のとおりである。

(1) 「養護実習指導」において、模擬保健指導又は模擬授業（保健）を担当した3年生が、児童・生徒役の学生から相互評価を受け、最上位の評価を得た場合、3年生は1年生向けに保健指導又は保健学習を行うことになっている。1年生向けに保健指導又は保健学習を行うには、ピア・支援活動の心得や目的を理解し、積極的に学習して必要な知識と技術の習得することが前提であり、グループの自己評価の平均点が2点以上あることが条件である。

表7は、ピア支援活動するための前提条件を満たしているか否かの自己評価（資料3）の結果である。結果の平均点はグループの構成人数の平均点である。

表7. ピア支援活動 自己評価（平均点）

グループ構成人数	27年度	28年度	29年度
	N 4=5	N 4=5	N 4=5
知識・理解	2.7	2.4	2.6
関心・意欲・態度	3.0	3.0	3.0
技能・表現	3.0	3.0	3.0

平成27年度生は、「知識・理解」に2.7点であり、「関心・意欲・態度」「技能・表現」全てに最高点の3点を評価していて、平成28年度生は、「知識・理解」が2.4点、「関心・意欲・態度」及び「技能・表現」が3.0点の評価であり、平成29年度生は、「知識・理解」が2.6点、「関心・意欲・態度」と「技能・表現」が3.0点の評価であった。各年度間に有意差は認められなかった。

(2) 表8の授業評価（資料4）は、相互評価を基に一部改変したものである。3年生が1年生向けに保健指導又は保健学習を行い、1年生に授業評価された結果である。

表8. 1年生向けの保健指導又は保健学習に対する授業評価（平均点）

年 度	27年度	28年度	29年度
1 年 生 数	N 2=32	N 2=35	N 2=31
観 点 1	2.5	2.8	3.0
観 点 2	2.5	3.0	3.0
観 点 3	3.0	3.0	3.0
観 点 4	3.0	3.0	3.0

平成27年度生に対する評価は、観点1と観点2が2.5点、観点3と観点4がともに3点であった。平成28年度生に対する評価は、観点1が2.8点、観点2～4が3.0点であり、平成29年度生

に対する評価は、観点1～4まで最高の3.0点であった。平成27年度生は自己評価が全てに3.0点と高かったが、授業評価が平成28、29年度生と比較してやや低い結果であったが、各年度間に有意差は認められなかった。

(3) 3年生が2年生に対し、指導案作成にピア支援活動を行った。その3年生に対する2年生の他者評価(資料5)の結果が表9である。平成27年度生に対する評価は「時間配分」が1点、「テーマ」に2.7点、「内容」及び「説明方法」が共に3.0点であった。

資料5. ピア支援活動 他者評価表

ピア支援活動 他者評価		十分 できた	できた	できてい なかった	全くでき ていない
		3点	2点	1点	0点
時間配分	(1) 時間内に進めることができた				
テーマ	(2) コミュニケーションが図れた				
内 容	(3) 指示内容や発言等が適切であった 興味をひいた				
説明方法	(4) 声が明瞭だった				

表9. 指導案作成 ピア支援活動他者評価 (平均点)

年 度		27年度	28年度	29年度
	2年生の受講数	N 3=21	N 3=15	N 3=18
時間配分	(1) 時間内に進めることができた	1.0	3.0	3.0
テ ー マ	(2) コミュニケーションが図れた	2.7	3.0	3.0
内 容	(3) 指示内容や発言等が適切であった 興味をひいた	3.0	3.0	3.0
説明方法	(4) 声が明瞭だった	3.0	3.0	3.0

平成28、29年度生に対する評価は「時間配分」及び「テーマ」「内容」「説明方法」全てに3.0点であった。

平成27年度生は、自己評価が高かったが、平成28、29年度生と比較して「時間配分」が低い結果であった。評価した学生数が少数のため有意差検定できなかったが、明らかに低い結果であった。各年度の「テーマ」及び「内容」「説明方法」の評価は近似値であった。

(4) 調査①「3年生による保健指導又は保健学習に対する1年生の意識調査」の結果は、表10の通りである。

表10. 調査①の結果「3年生による保健指導又は保健学習に対する1年生の意識調査」

年 度	27年度		28年度		29年度		
1年生数	N 2 = 32		N 2 = 35		N 2 = 31		
理解できた	32人	100%	35人	100%	31人	100%	
知識が増えた	32	100	35	100	31	100	
楽しかった	32	100	35	100	31	100	
実践しようと思った	19	59.3	25	71.4	24	77.4	
実践しない (その理由)	経済的理由から	2	6.3	0	(-)	0	(-)
	面倒だから	7	21.8	3	8.6	2	6.5
	時間がないから	4	12.5	7	20.0	5	16.1
先輩にあこがれる	24	75	31	88.6	31	100	
先輩のようにピア活動したい	24	75	30	85.7	31	100	

平成27年度生の1年生は、3年生が行う「保健指導又は保健学習」を受けて32名全員(100.0%)が「理解できた」「知識が増えた」「楽しかった」と回答し、習得した知識を活用して19名(59.3%)が「実践しようと思った」と回答していた。「実践しない」学生の理由は、2名(6.3%)が「経済的理由から」であり、7名(21.8%)が「面倒だから」、4名(12.5%)が「時間がないから」と回答していた。24名(75.0%)が3年生に「先輩にあこがれる」、「先輩のようにピア活動したい」と回答していた。

平成28年度生の1年生は、35名全員(100.0%)が「理解できた」「知識が増えた」「楽しかった」と回答し、習得した知識を活用して25名(71.4%)が「実践しようと思った」と回答していた。「実践しない」学生の理由は、3名(8.6%)が「面倒だから」、7名(20.0%)が「時間がないから」と回答していた。31名(88.6%)が3年生に「先輩にあこがれる」、30名(85.7%)が「先輩のようにピア活動したい」と回答していた。

平成29年度生の1年生は、31名全員(100.0%)が「理解できた」「知識が増えた」「楽しかった」と回答し、習得した知識を活用して24名(77.4%)が「実践しようと思った」と回答していた。「実践しない」学生の理由は、2名(6.5%)が「面倒だから」、5名(16.1%)が「時間がないから」と回答していた。31名(100.0%)が3年生に「先輩にあこがれる」「先輩のようにピア活動したい」と回答していた。

(5) 調査②「3年生によるピア支援活動に対する2年生の意識調査」の結果は、表11の通りである。

表11. 調査②の結果「3年生によるピア支援活動に対する2年生の意識調査」

年 度	27年度		28年度		29年度	
2年生数	N 3 = 21		N 3 = 15		N 3 = 18	
理解できた	21人	100%	15人	100%	18人	100%
知識が増えた	21	100	15	100	18	100
受けて良かった	21	100	15	100	18	100
先輩にあこがれる	21	100	13	86.7	15	83.3
先輩のようにピア活動したい	21	100	13	86.7	15	83.3

平成27年度生の2年生は、3年生が行うピア支援活動を受けて21名全員（100.0%）が「理解できた」「知識が増えた」「受けて良かった」と回答し、21名（100.0%）が3年生に「先輩にあこがれる」「先輩のようにピア活動したい」と回答していた。

平成28年度生の2年生は、15名全員（100.0%）が「理解できた」「知識が増えた」「受けて良かった」と回答し、13名（86.7%）が「先輩にあこがれる」「先輩のようにピア活動したい」と回答していた。

平成29年度生の2年生は、18名全員（100.0%）が「理解できた」「知識が増えた」「受けて良かった」と回答し、15名（83.3%）が「先輩にあこがれる」「先輩のようにピア活動したい」と回答していた。

V. 考察

本研究は、将来養護教諭を目指す学生の「保健教育（保健指導・保健学習）」に関する指導力習得と向上を目的に、平成27年度から実施の1年次から3年次までの一貫しピア支援活動と課外指導を利用した指導方法について教育効果を検討したものである

(1) 模擬保健指導又は模擬授業（保健）の相互評価及び自己評価については、表3、4の結果の通りである。相互評価の結果は表3であり、授業自己評価は表4の示す通りである。

平成27年度生の授業自己評価は最下位の観点4の2.6点以外は最上位と最下位ともに最高点の3点と高く、しかも平成28年度生の最下位の評価（全ての観点到2.6点）と最上位の評価（2.0～3.0点）及び平成29年度生の最下位の評価（2.0～2.5点）と最上位の評価（2.5～3.0点）よりも高かった。

しかし、他者評価に相当する授業評価では、平成27年度の最下位の評価（1.5～1.8点）は、平成28年度の評価（1.8～2.0点）及び平成29年度の最下位の評価（2.1～2.3点）よりも低く、最上位の評価においても平成27年度の最上位の評価（2.5～2.8点）は平成28年度の最上位の評価（2.8～2.9点）及び平成29年度の最上位の評価（2.8～2.9点）よりも低い結果であった。

平成27年度生の自己評価が相互評価よりも高いことや、相互評価が平成27、28年度生のよりも低いことから、平成27年度生の自己評価の信頼性が低く、保健教育の力量も低いことが解った。この両者の違いは、わずかであるが、平成28、29年度生の課外指導①の時間が90分間の3回であり、平成27年度生は60分間の3回であるので、課外指導①の時間の長さによる影響があったと考えられる。平成28、29年度生の課外指導は教育効果があったと解釈できる。

しかし、その後の課外指導②を受けたことにより、表7のピア支援活動の自己評価では、平成27年度生の平均点が2.7～3.0点であり、平成28年度生のそれらの平均点が2.4～3.0点であり、平成29年度生のそれらの平均点が2.6～3.0点であり、各年度間の平均点に有意差がなく、近似値であったので、平成27年度生の評価が妥当な自己評価になったのは、課外指導②を受けたことによって、適切に自己評価ができるようになったものと解釈し、教育効果があったと考える。

表8の1年生の授業評価の観点1～4の平均点では、平成27年度生が2.5～3.0点であり、平

平成28年度生が2.8～3.0点であり、平成29年度生が全て3.0点であった。各年度間に有意差がなく近似値であったので、平成27～29年度生ともに保健指導・保健学習指導の力量が高くなっていった。表10の1年生の意識調査の結果では、平成27～29年度生全員の学生（100%）が「理解できた」「知識が増えた」「楽しかった」と回答していた。評価及び好ましい回答率が高かった。但し、「実践しようと思った」に関しては、平成27年度が平成28、29年度生（71.4～100%）よりも低い回答率（59.3%）であった。

平成27～29年度生の課外指導②-1の教育効果は、平成28、29年度生には明らかに教育効果が認められたが、平成27年度生に対する教育効果はやや認められたという状況であった。

養護実習の成績（表6）では、保健指導及び保健学習、保健教育以外の平均点は平成27年度が75～82点であり、平成28年度のそれらの平均点は88～90点であり、平成29年度のそれらの平均点は88～94点であった。平成27年度生の成績は、保健指導、保健学習、保健教育担当の平成28、29年度生と比べて若干低いが、各年度間に有意差は認められなかった。

しかし、平成27年度生全員の保健教育に関する課外指導①が60分間を3回であり、平成27、28年度生は90分間を3回行っているので、平成27年度生も90分間を3回必要であったことがこの結果からも解った。平成28、29年度生は課外指導①の教育効果は認められた。

(2) 2年生向けの指導案作成に関するピア支援活動については、表9～11の結果の通りである。ピア支援活動の支援される学生は支援されやすさを感じ、質問しやすいこともあり、教育効果がある⁶⁾。表9のピア支援活動生に対する評価は、平成27年度の「時間配分」以外は、高い平均点であった。

表11にみられる2年生のピア支援活動に対する意識調査では、「理解できた」「知識が増えた」「受けて良かった」と全員（100.0%）が解答し、「先輩にあこがれる」「先輩のようにピア支援活動がしたい」と86.7～100.0%の多くの学生が回答していた。これはピア支援活動生に対して、後輩が感情表現しやすいという特徴がある⁷⁾⁸⁾が、課外指導②-2による教育効果があったと考える。

(3) 今後のピア支援活動については、調査①と②の結果（表10、11）から、平成28、29年度生の85.7～100.0%が「先輩にあこがれる」「先輩のようにピア支援活動がしたい」と回答していることから、平成30年度生のピア支援活動生の活躍が期待される。

VI. 結論

本研究は、将来養護教諭を目指す養護実習参加学生の「保健教育（保健指導・保健学習）」に関する指導力習得を目的に、平成27年度から実施の1年次から3年次までの一貫した課外指導及びピア支援活動を利用した指導方法について教育効果を検討したものである。その結果、平成28、29年度生には養護実習参加学生全員に90分間を3回の課外指導を行ったことやピア支援活動生として課外指導を行い、1年生向けの保健指導又は保健学習の経験、2年生向けの指導案作成の支援活動経験により、相互評価や他者評価が高く、養護実習校の評価も平均点の88

点以上あり、教育効果が認められた。

VIII. 参考文献

- 1) 田中滉至、山田浩平、古田真司、「保健の授業における授業者の意識教育」システム情報学会 2015年度 学生研究発表会
- 2) 斎藤ふくみ 保健学習の模擬授業におけるピアティーチング効果の検討－相互評価の分析と発問分析から－日本養護教育学会 12(1) 89-96 2009
- 3) 家田重治 保健科教育151-153 杏林書院 2003
- 4) 森昭三 和唐正勝 保健の授業づくり入門38 大修館書店 2009
- 5) 森川澄男 ピア・サポート活動（中学校）現代のエスプリ別冊臨床心理士によるスクールカウンセラー Pp.149-161,153-154 2000
- 6) Fielding, S, Pili,C & Chambliss,C. Promoting awareness of a high school peer helping program, Urainus College ERIC Document Reproduction Service No.ED419192 1998
- 7) 白石龍生 保健授業の生徒による評価の研究 大阪教育大学・健康教育実践学 1998